

◇愛のともしび事業（東日本大震災から「生き方」を学ぶ） の事前学習が行われました

2月12日（水）に南三陸町の元副町長 遠藤健治さんと ZOOM を繋ぎ、東日本の当時の様子や、防災、復興、それに尽力された方々の「生き方」を学ぶ機会があります。その日に向けて、3年生の各学級で事前学習が行われました。

愛のともしび
東日本大震災の経験から
「生き方」を学ぶ

2月12日③④時間目
副町長
遠藤健治さん
Zoomを繋ぎ震災当時の様子や復興に立ち向かった想いなどを語っていただきます。

最後まで防災無線で避難を促していた遠藤未希さんと働いていた。健治さんは階段の手すりにしがみつき、波が止むのを待った。



★事前学習では、次の二つの視点で、「生き方」について考えました。

「生き方」を考える①

自分の命も顧みず、最後まで危機管理室に居残り、指揮を取ったのはどのような思いがあったのだろうか？

「生き方」を考える②

自身も「被災者」であるのにも関わらず、避難所へ赴いて支援をし続けたのはなぜか。（自身の家族の安否さえ確認できていなかった）副町長という立場のため、被災者から、罵声を浴びることもあった。それなのになぜ復興に力を入れて動けたのか。





事前学習を終えた生徒の振り返りの一部

今日の学習を通して、東日本大震災ではどれだけ悲惨な出来事だったかを改めて知ることができました。副町長という立場で、ご自身も被災者でありながら、防災対策に関して被災者の方から心無い言葉を向けられたこともあるということを聞きました。それでも、人々のために働き続けた遠藤さんは、それだけ、南三陸の町やそこに生きる人々を愛していたし、副町長という自分の責務を感じていたのだと思いました。「黒い壁が押し寄せる」状況はすごく怖かったはずですが、でも自分の「信念を貫く」ために戦っていたのかなと思いました。

自分の命が危険にさらされる中、防災対策室に残り続けた遠藤さんのことを知り、その決断をするという「生き方」のすごさを感じつつ、多くの疑問も浮かんできました。「仕事への責務」と「自分の命」を比べると、まずは、「命を優先」してしまおうと思います。なぜなら、そこに居続けることによって、遠藤さん自身の命が奪われてしまうことになりかねないからです。遠藤さん自身のご家族や大切な人を悲しませることになります。(防災対策室に残るということは、)僕には、思いもつかないような決断です。だからこそ、衝撃的でした。次回の ZOOM では、その当時の遠藤さんの思いなどを聞いてみたいと思います。

最後に、気仙沼の避難所で行われた卒業式の答辞の映像を見ました。



<答辞の一部>

自然の猛威の前には
人間の力はあまりにも無力で
わたくし達から大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには おごすぎるものでした。つらくて、悔しくて たまりません。
命の重さを知るには大きすぎる代償でした。
しかし、苦境にあっても 天を恨まず、運命に耐え
助け合って生きていく事がこれからのわたくし達の
使命です。

卒業式まで19日と迫った教室の中では、映像を見ながら涙をこらえている生徒もいました。事前学習を終えて、山本明依さんは、「“愛のともしび”の事前学習を終えて、19日後に行われる私たちの卒業式のことを考えていました。もうすぐ、9年間共に過ごしてきた仲間との別れが来ます。しかし、東日本大震災の当時、私たちとは違う心境で、“卒業”を迎えた中学生がいたことを知りました。とても悲しい気持ちになりました。私は、改めて、この仲間のことを大切だと感じました。この仲間と過ごせた時間が、『当たり前』だと思っていた日常が、『かけがえのないもの』であったことに気付かされました。」と学習を振り返りました。